

明治後期の実業教育と修養主義

—— 群馬県桐生町の地方雑誌にみる ——

坂 根 治 美

Technical education and Shuyoshugi in the later Meiji era

—— An analysis of a local magazine in Kiryu, Gunma prefecture ——

Osami Sakane

In the later Meiji era, there were many graduates of Tokyo Koto Kogyo Gakko (including former Tokyo Kogyo Gakko) in Kiryu district, Gunma prefecture and most of the teaching positions of Kiryu Orimono Gakko were occupied by these graduates.

A local magazine was published periodically by Kiryusha (an association of teachers of Kiryu Orimono Gakko who were graduates of Tokyo Koto Kogyo Gakko). This magazine contained many articles pertaining to the method of the economic development of Japan or Kiryu district written by the president, teachers and graduates of Tokyo Koto Kogyo Gakko.

The president of Tokyo Koto Kogyo Gakko, Seiichi Tejima, was a supporting member of Shuyodan (a representative group of Shuyoshugi) and other authors of the articles in the magazine also believed in the importance of Shuyo (cultivation of mind), especially in the importance of Shuyoshugi education for the factory hands of the Kiryu textile industry, to further the industrialization of Kiryu district.

The graduates of Tokyo Koto Kogyo Gakko in Kiryu, who were educated by Seiichi Tejima, spread Shuyoshugi to Kiryu district as the editors and the authors of the local magazine of Shuyoshugi and also as the practitioners of Shuyoshugi education. Thus these graduates played important roles in the development of capitalism in Kiryu district.

Key words: higher education, technical education, Shuyoshugi, local leaders, modern Japan

1. 課題の設定

筆者は先に、日本資本主義と修養主義に関する筒井の仮説¹⁾を事例的に検討することをとおして、群馬県桐生地方の産業発展に関しては東京工業学校およびその後身の東京高等工業学校における修養主義的教育が重要な役割を果たしたのではないかと仮説を提示したが²⁾、本稿はその仮説を一地方雑誌を素材として検討するという位置づけにある。

この地方雑誌には東京（高等）工業学校の教

員や卒業生の論説が頻繁に掲載されているが、桐生の主要産業である織物工業をめぐる彼らの論説をとりあげて、それが修養主義とどのような関係にあるのかを検討し、桐生における修養主義の浸透と資本主義の発展過程において、これら東京（高等）工業学校関係者がいかなる役割を果たしたのかを考察することが本稿の具体的な課題となる。

2. 桐生地方における東京(高等)工業学校卒業生と雑誌『織物工業』

明治末期の桐生地方においては、当時の中等学校卒業生数を考慮にいたした場合、東京(高等)工業学校の卒業生数の多さが目をひくが、実業教育費国庫補助法によって明治29年に創設された町立(のち県立)桐生織物学校の教員の多くも東京(高等)工業学校卒業生によって占められていた³⁾。

桐生織物学校の存続は官立の桐生高等染織学校の創設の関係で大正2年までであったが、その間の桐生織物学校の教員中、東京(高等)工業学校の卒業生は、金子竹太郎、岩下龍太郎、前原悠一郎、小嶋常太郎、蜂谷徳三郎、佐田友雄、小山鶴二、前原準一郎等があげられ、そのほとんどが桐生の出身であることが明らかにされている⁴⁾。また、東京工業学校卒業生ではないが、東京(高等)工業学校の教員として明治23年以降上記卒業生達に接した高力直寛が、明治43年から桐生織物学校教諭のちに校長として勤務することにもなるのである⁵⁾。

さて、これらの卒業生達のうち、金子竹太郎、岩下龍太郎、前原悠一郎の3人によって明治29年9月に雑誌『桐生の里』が創刊され、以後『桐生之工業』『織物工業』と名称変更しながらもこの3人を中心メンバーとする結社である「桐生社」によって明治末期まで刊行が続けられることになる⁶⁾。

この桐生社は「桐生織物の健全な發達を念願」して設立された結社であるが⁷⁾、『桐生の里』の巻頭言に、「記載する所實業家の意見諸大家の卓説商工業の實況を以て重なるものとす」とあり、明治31年10月に『桐生之工業』と改題された際の発刊の趣旨に、「其期する所は工業…殊に染色の改良と機織の發達とを計るに在り」とあるように⁸⁾、これらの雑誌は桐生の織物産業の發展の為の情報源としての役割をめざしていたと理解できよう。

この雑誌の読者層の中で注目されるのは、桐

生町における主要経済人の団体である桐生懇和会会員である。同会は、明治33年9月に地元有力者を網羅して桐生町發展のために尽くすことを目的として設立された団体であるが⁹⁾、金子竹太郎(明治33年12月入会)に加えて桐生社のもう一人の中心人物の前原悠一郎が入会(明治34年4月)すると同時に同誌は桐生懇和会の機関誌的役割をも担うことになり、『桐生之工業』第32号(明治34年5月15日発行)から同会の定例会の議事録、開催案内などが掲載され、同会の全会員に配布されることになる¹⁰⁾。明治の後半期より大正の初期にかけて桐生發展の企画部となったといわれる桐生懇和会¹¹⁾の会員にこの雑誌が直接届けられるようになったことは、同誌の前述のような目的からするときわめて大きな意味を持つと考えられるのである¹²⁾。

ところで、『桐生の里』から『織物工業』にいたる雑誌が刊行されていた期間の桐生織物の生産状況は図1のとおりである¹³⁾。この図から考えると明治33年から日露戦争が始まる明治37年の期間は、全国の状況と比較して急速な生産の減少がみられ、桐生織物産業の大不況期にあたっていたといえるだろう。明治38年以降は内地向けの産額の増加により持ち直す傾向にはあるものの輸出の伸び悩みがみられ、全国的な發展状況からは取り残されつつあったと捉えることができよう。

そうした状況下、桐生地方においては織物の種類ごとの振興団体があいついで設立されている。表1¹⁴⁾にみるように明治29年から明治44年までに11の団体が設立されているが、いずれも「振興」、「發達」、「改善」、「改良」、「進歩」という目的を持っていることから、当時の桐生織物の生産状況を反映したものであると考えることができる。

このような産業の状況のもとで、東京(高等)工業学校関係者の桐生織物産業に関する意見の『織物工業』誌上への掲載が続くことになるのである。

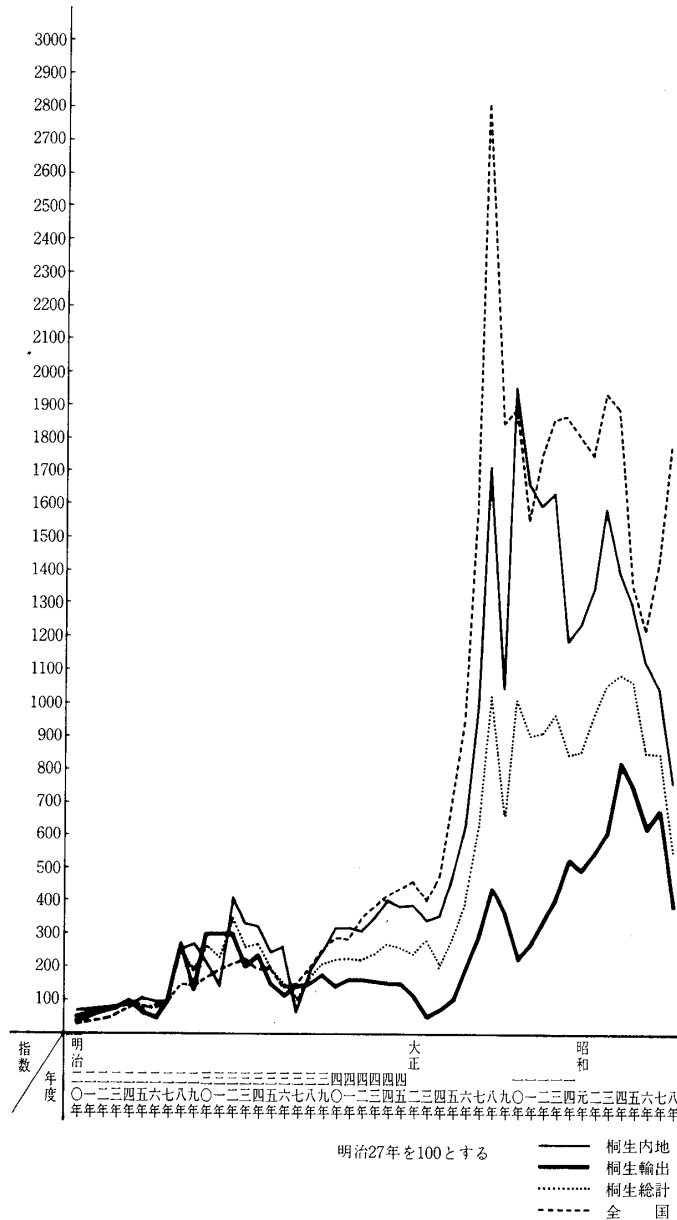


図1 桐生織物生産額の推移

3. 『織物工業』誌上における実業教育論と修養主義

(1) 日露戦争前

『織物工業』の前身誌『桐生之工業』第38号(明治34年11月5日発行)および第39号(明治34年12月5日発行)に、当時まだ東京高等工業学校に在学中の前原準一郎が「桐生の織物工業振興策に就て」を寄稿している¹⁵⁾。彼が第一にとりあげているのが機業者の道徳の問題であ

る。桐生地方における風儀の状況を指摘しながら、彼は次のように主張する。

(前略)同じ原料を用ひても其製品に甚しき優劣あるは、只職工の手先の巧拙ばかりでなく、彼等の意志の如何も非常なる影響をなすことである、故に我桐生の織物工業の進歩發達を望まば、直接間接に之に従事する人は、先づ第一に根本的に浮華輕佻の風習を脱し、技術に關する智識の發達を計

表1 桐生織物振興諸団体 (明治期)

会名	設立年月日	目的	会員	設立当時幹部氏名	事務所所在地
桐生実業談話会	明治29年8月29日	桐生織物の振興	当業者	発起人不明	不明
着尺競励会	明治36年	着尺物の発達	着尺織同業者	会長 森山芳平	不明
桐生織物研究会	明治37年7月10日	桐生織物の改善発達	機業家の有志	会長 書上文左衛門	桐生物産同業組合
生紹改良同盟会	明治40年4月8日	生紹の改良	生紹機屋及び同買次商	会長 福田常吉	桐生織物同業組合
縺子織物業者同志会	明治41年1月	縺子織物の発達進歩	縺子織同業者	会長 福田大三郎	〃
桐生九日会	明治41年	着尺物の製造販売の改良発達 会員の親睦	書上商店と密接なる着尺業者	会長 書上金次郎	書上商店
桐生協励会	明治42年3月19日	山吹織の改善発達	境野在住同業者	会長 牧島栄四郎	桐生織物同業組合
桐生相進会	明治42年6月2日	純絹高等帯地の改良進歩	新宿在住帯地機屋	会長 福田森太郎	〃
桐生燃糸研究会	明治43年5月1日	燃糸の進歩発達	桐生在住燃糸業者	会長 前原悠一郎	〃
御召秀友会	明治44年7月13日	御召縮緬及び類似織物の改良 発達	同業機屋買次商	会長 福田常吉	〃
両毛織物同業組合連合会	明治44年7月22日	組合相互連絡 同業の福利増進 染織工業の進歩発達	両毛機業地5ヶ所	会長 川島太一郎	組合所属の同業組合 事務所

ると共に、意志の修養を勉め、職工を監理するにも此心を以てしなければならぬ¹⁶⁾

桐生の織物工業発展のためには、職工その他の関係者が技術のみならず意志の修養を重視することの必要性が主張されているが、以後同誌に掲載される論説もこうした点に注目することになるのである。

つづいて『桐生之工業』第40号(明治35年1月5日発行)には、東京工業学校の卒業生で桐生織物学校教頭の金子竹太郎の「桐生に関する杞憂」という意見が掲載されている。彼は桐生機業に関して大いに憂慮する点として、①機業家の道徳、②機業家の技術、③工業の組織、④販路の具合の4点を挙げているが、前原準一郎同様、機業家の道徳問題を筆頭に位置づけて、次のように語っている。

天下何の職業か道徳を基本とせずして成立するものあらんや、工業に於ても亦然り、夫れ工業の一部たる機業に従事するものゝ道徳中、最必要なるものは信用なり、實に信用は無形の資本にして、之あらば有形の資本に據らざるも、業務を営むことを得れども、之なければ如何に富巨萬を重ねるも、斯業を繼續すること難し、凡て人類の通癖として、有形的に重きを置き、無形的を輕んずる者多し、(中略)一般桐生機業家は無形にして、然も第一の資本ともなるべき信用に意を傾けざるものに似たり¹⁷⁾

このように、金子は信用ということを道徳に関する中心問題として位置付け、次のように、競争を勝ち抜いていくための信用の重要性を指摘するのである。

(前略)着實なる精品を製造し相當價格にて之を販賣し、品質の佳良てふ要件に従て競争をなす仕組とせば、縱令一時多額の賣行なきも、漸を追ふて進化し、其地方の機

業家が同歩調にて改善の方面に向ふことを得べし¹⁸⁾

そして、この道徳問題と教育との関係については、金子は次のように語っている。

血に交はれは赤くなるとは從來桐生機業家の道徳心が不振興たりし原因を示すに足る俗諺なり、縱令道徳心を有する少數の機業家ありとするも、多數の爲に制せられ不知不識其渦中に陥るを以て、斷然精神的改善を行ふこと能はざりしなり、有志茲に見るありて、兒童又は青年の教育に意を注ぎ、専ら徳育論を主張す、之と同時に各小學校並に群馬縣立桐生織物學校の如き、層一層徳育に重きを置き、家庭と相待て之を指導す故に此等の子弟か近き將來に於て、桐生機業界を組成する時に達しなは、麻の中の蓬は矯めざるに直く、自然工業道徳の振興を見るに至らん¹⁹⁾

桐生織物学校教頭の金子竹太郎は、桐生機業界の道徳の面での問題を指摘し、桐生の諸学校における徳育に期待をかけているのである。

その桐生織物学校の別科生五十嵐新太郎の職工問題についての意見が、『桐生之工業』第45号(明治35年6月5日発行)に掲載されている。彼は、「職工の惡風(中略)は、何れの機業地を問はず盛に行はるゝ」が、「現今の如き工業發達の機に際しては、此恐るべき弊風を矯正するを得ば、其工業思想を發達せしめ、國家經濟上に貢獻する所、決して少からざるは余の信して疑はざる所」であると述べ、職工の教育については「第一風儀を矯正し廉耻を重んぜしめ、或は徳義心を起さしめ」ることなどが重要であると語っている²⁰⁾。ここでも産業發達のための徳育の重要性が指摘されているのである。

このように、東京高等工業学校生徒、同校卒業の桐生織物学校教頭、桐生織物学校の生徒といった人間関係の中で、桐生の機業の發展策と

しての意志の修養、徳育の問題が明治34年から35年にかけて議論されている状況があった。こうした議論が地方雑誌『桐生之工業』を通して、桐生の産業の指導者、桐生織物学校の生徒や卒業生といった層に読まれている状況にあったのである。

ところで、これらの論者に共通するのは桐生の織物産業についての危機意識である。前原準一郎の寄稿が、桐生の風俗の悪さを指摘する外部の人の声を受けてのことであったこと²¹⁾と同様、金子竹太郎の場合も桐生機業に対する「大に憂慮に堪へざる」²²⁾という思いがあったこと、さらには五十嵐新太郎も「眼前に横はる弊風悪儀も其儘放任するに至りては、斯業界の爲め寒心に堪へざる次第なり」²³⁾とその危機意識を示している。

筒井は、修養論者の多様な立場を紹介しながらも、彼らは危機意識の保持・表出という共通点を有していたことを述べているが²⁴⁾、この時期の桐生における職工の風儀の問題や織物業の不振(図1)の問題の存在を、こうした修養主義的論説を桐生の地方雑誌が取り上げたことの背景として位置づけることができるだろう²⁵⁾。

さて、『桐生之工業』誌上においてこうした徳育論が展開された後、翌明治36年6月5日発行の同誌第57号には、同地方実業家の組織「桐生職工義會」創設が報じられることになる。

同会の規約書をみると、その目的は以下のようなものであった²⁶⁾。

第貳章 目的

第参條 本會の目的は工業の基礎を鞏固ならしめ産業の發達を謀るを以て目的とす

第四條 前條の目的を達せんか爲毎月一回(十五日)修養的教會を開き職工子弟に善良なる習慣を養成するにあり

第五條 本會員は職工子弟に對し時々教師を招き尋常小學程度の課目を教授

すべし

第六條 本會々員は職工子弟に對する懇切に其の職業を傳習せしむべし

第参條にみるように、同会の目的は産業の發達ということにおかれているが、その為の具体的方策として職工子弟の善良な習慣を養成することをめざして毎月修養的教會を開催することが規定されている(第四條)。職工子弟に対する尋常小学程度の課目の教授(第五條)や、彼らに対する職業教育(第六條)と同等あるいはそれ以上に、産業發展のための直接的な手段として修養的教會が重要視されていることが注目されるのである²⁷⁾。

こうした動きの背景の一つとして、当時の職工の教育状況の問題が指摘できよう。前掲の五十嵐新太郎は、「職工彼等の多くは將來はいざ知らず、現時にありては身を貧苦の境界より起し無教育」で、「彼等の多くは目に一丁字なき」²⁸⁾状況であると述べ、当時の職工の無教育状態が示されているのである。

(2) 日露戦争後

この職工の教育問題に関して、日露戦争後の東京で新たな試みが始まるのが『織物工業』第87号(明治38年12月1日発行)において報じられている。これは東京高等工業学校長手島精一等の提案による「適材教育」であり、東京府立職工学校において4つの民間会社で選抜された47人の機械職工に、数学、製図、器械学実習を内容とする授業を、週2回、1回3時間行うもので、わが国の職工改良の手始めとするという位置づけで開始されたものであった²⁹⁾。

当時のわが国の各種工場における職工の学歴が、『織物工業』第91号(明治39年4月1日発行)に示されているが、それによると調査対象となった紡績会社25工場の職工27,413人の内、工業学校卒業者は5名のみ、義務教育修了者11,850人、秩序的教育を受けていない者15,558人となっている。また織布会社5工場の場合、職工4,016人中、工業学校卒業生1名、義

務教育修了者 1,859 人、秩序的教育を受けていない者 2,156 人である。いずれも過半数の者が正規の学校教育を受けていない状況にあったのである³⁰⁾。

このように、職工の大半に制度化された学歴がない状況にあつて、職工改良の試みが始まろうとしていたのが日露戦争後であつたが、そうした状況下の若者に向けた工学博士阪田貞一の「工業界の青年に告ぐ」が『織物工業』第 113 号(明治 41 年 2 月 1 日発行)の「訓言録」欄に掲載されている。東京高等工業学校教授である阪田はここで、①「如何なる仕事でも一度其業務に就いたならば、直ちに自分のものと思ふべき事」、②「他人の技倆、同僚の進級を猜疑せず、只だ自己の本務を怠るなき事」、③「何卒かして自分は有用なる否寧ろ必要なる人とならんと熱心な希望」を持つことの三点を主張している³¹⁾。

この主張には、修養主義運動の嚆矢、清沢満之のそれと相通じるものがある。清沢は次のように主張している。

各個人の道德進歩は、天稟と修養とによりて差等あるなり。天稟に属するものは、吾人の如何ともし能わざる所なり。吾人の最も要とすべきは修養のことに属す。修養は人生の第一義たるものなり。

修養の方法如何。曰く、須らく自己を省察すべし。自己を省察して、天道を知見すべし。天道を知見せば、自己に在るものに不足を感じることなかるべし。自己に在るものに不足を感じざれば、他にあるものを求めざるべし。他にあるものを求めざれば、他と争うことなかるべし。自己に充分して、求めず、争わず、天下之より強勝なるものなし、之より広大なるものなし³²⁾。

ところで、こうした清沢満之の修養主義思想につながると判断されるこの阪田貞一の主張の記事は雑誌『実業之日本』からの引用である。そ

の実業之日本社社長の増田義一は修養団の賛助員に名を連ねている³³⁾ことから判断して、『織物工業』にこうした記事が引用されていることを同誌の修養主義的性格を示す一つの証拠ととらえることができよう。

同じ『織物工業』第 113 号の「訓言録」欄には、東京高等工業学校長手島精一の「學ぶべき歐米職工の美質」も掲載されている。彼は、同校に雇用している外国人職工が職務に全力を尽くし、読書、音楽という趣味を楽しむ状況を紹介し、「職工の品性が善くて職務に忠實に己の責任を重んずる美質はどうか歐米の職工をまねたい」と主張し、「魂の据へ所」の重要性を指摘しているのである³⁴⁾。

こうした外国との対比という点に関しては、翌月の『織物工業』第 114 号(明治 41 年 3 月 1 日発行)の「訓言録」欄に同じく東京高等工業学校教授の齋藤俊吉の「外國の職工」が掲載されている。「外國の職工が日本の職工より感心な点は職務に忠實な點で職務時間は少しでも傍目を振らず人が居らふか居るまいが頓着せず熱心に仕事をやる」ことをとりあげて、彼は「職業となれば忠實に働く是が英國否な歐米全體を通しての職工氣質であります。願くば日本にも斯様に氣品のある職工が澤山欲しいものです」と述べている³⁵⁾。

外国との競争という観点が明確にみられるこれらの意見にも、職務に忠実であるということを経済発展をつなぐ論理が背景にあると考えてよいだろう。

こうした職工の氣質と教育との関係については、同年の『織物工業』第 122 号(明治 41 年 11 月 1 日発行)に「職工の教育に就て」と題する論説が掲載されているが、その著者は、桐生における職工の状況を調査した結果、彼らの品性の劣等であること、それは教育が普及していないことによることを指摘し³⁶⁾、次のように対策案を述べている。

(前略)職工をして是非教育あらしめ善良

なる者となすは尤も必要の事である而して其施すべき教育は單に技術の教育のみでなく品性を練磨せしむる方法を講じ人格の賤しからざる良工とならしむるのは緊要の事で其方法としては種々あるけれど今日の適材教育可なるべく補習教育亦可である（中略）斯の如く補習教育によつて技術上の練習を積ましめ確實にすると共に教育により智識を授け品性を磨かしめ以て工場に有用なる職工を養成せんは只に職工をして良工たらしむる許りでなく雇者被雇者との間に恩惠情義的關係を結ばしめ尚工場主の利のみならず國家の利たることは論を待たないのである³⁷⁾

このように、品性の練磨を技術の習得と同様に重視することが、経営上さらには國家にとっても有効であることが指摘されるとともに、東京において東京高等工業学校長手島精一の主唱によって開始された適材教育や同校附属工業補習学校で手島が熱心に進めていた補習教育³⁸⁾といった教育のありかたが、『織物工業』誌上で繰り返し桐生地方へ紹介されているのである。

さて、その職工教育に関してここで注目したいのが、明治42年7月の桐生織物学校校友会による染織講習会の開催である。この講習会は、「當地の職工徒弟に修身並に染色法（染織法の誤まりか：引用者）の大意を授けて其品性を高尚ならしむると同時に簡易なる學理を應用せしめて斯道の發展を計りたるに其好果大いに見へたり」³⁹⁾と報じられたように、技術に直接関わる学理ばかりでなく品性の問題を重要視して開催されたものであった。こうした点に注目すれば、この講習会を、この当時までに『桐生之工業』、『織物工業』誌上で展開された論説が具体化されたものとしてとらえることができよう⁴⁰⁾。

こうしたかたちで雑誌中の論説の理念が実践される状況となっていたのであるが、『織物工業』第139号（明治43年4月1日発行）には、東京工業学校卒業の元桐生織物学校教諭で模範

工場桐生撚糸株式会社社長の前原悠一郎の論説「工業の發展と職工問題」が掲載されている。「我國が世界列強の班に入り一等國となり戦後の商工界發展進歩を十數年前と比較回顧すれば吾人等の夢想にも及ばざる長足の向上發展せる」状況にあつて、「職工問題は刻下の急務なりとす」と述べる前原も、「向上的方面に於て精神修養の慰安等を」なすことを主張し、自らの工場においてその効果の上がつていることを紹介している⁴¹⁾。こうして桐生の近代的企業においても修養主義的経営が行われる状況を見ることができるのである⁴²⁾。

翌月の『織物工業』第140号（明治43年5月1日発行）から第142号（明治43年7月1日発行）にかけて、東京高等工業学校長手島精一の論説「職工教育の必要並に其方法」が連載されているが、手島は、「善良なる職工は必ずしも其職業に精しきが爲めにあらずして、只今日の社會に處する常識を具備すれば足る、輒もすれば彼等の舉動粗暴に流れ、又時に自ら卑むは畢竟専門の智識乏しきが故にあらず、只常識の足らざるに依るなり」と述べ、また、「精神修養と云ひ或は又人格修養と云ふ聲到る所に聞へ、職工の改善を云ふもの又必ず人格の修養を云々せざるなし。是れ甚だ喜ぶべきことなりと雖も、如何にして善良なる人格を養成せんかの方法に至りては、未だ多く傳ふるなし」と指摘して、東京高等工業学校附属工業補習学校において時々開催される修養講話会、毎週一回の修身講話、交友と読書の趣味の養成のための校友会等を有効な手段として紹介しているのである⁴³⁾。

そして、手島は修養の重要性を次のような言葉で語っている。

學校の如き所に於て適宜に慰安休息せしめ兼て修養の道を講ずるにあらずんば、精神の修養上將來洵に恐るべき惡結果を生ずることなきを保せざらん⁴⁴⁾。

前出の前原悠一郎の述べる「向上的方面に於

て精神修養の慰安等を」なすことの必要性が、手島のこの意見中にほぼそのまま含まれている点が注目されよう。

『織物工業』第142号には、手島精一、森村市左衛門と並んで修養団草創期の功労者と位置づけられている渋沢栄一⁴⁵⁾の桐生での講演（明治43年6月2日）も論説「商工業の發達と實業教育」として掲載されているが、渋沢は次のように語っている。

（前略）學理を實際に應用する事に力むると同時に我々は此の共同一致の精神を養成しなければならぬと思う、智育が如何に進歩したればとて徳育が發達しなければ駄目だ、科學が如何に發達しても夫れに伴ふ精神修養が出來て居なければ各種事業の發展を期する事は能ない⁴⁶⁾

渋沢はさらにインドへの織物輸出にからむ悪徳業者の例をあげて次のように語る。

之を防ぐは一に道德に依る、科學を發達せしめて其の應用を期し精神の修養と共同一致の實を擧げ俱に共に各種事業の發達進歩を計る事は今日我々の最も勉めねばならぬ急務であると思ふ⁴⁷⁾

わが国実業界の指導者渋沢栄一は、桐生の人々に直接このように語りかけ、さらにその内容が『織物工業』誌をとおして前記読者層に伝えられることになるのである。

ここまでみてきたように、日露戦前後の桐生機業界の苦境期に雑誌『桐生之工業』、『織物工業』において各論者の語るところは、ほぼ一貫してわが国や桐生地方の産業に関する危機感の表明とそれに対処して産業を發展させるための修養の必要性である。雑誌『織物工業』はその前身誌『桐生之工業』時代からほぼ変わらぬかたちでこうした論説を掲載し続け、その理念が桐生地方において具体的に実践されていく状況

をみることができるのである。

4. 結論—明治後期の桐生町における修養主義—

このように、当時の桐生地方において「修養」ということが重視された背景をまとめると以下のようなになると考えられる。

まず、当時の桐生織物産業において職工等の風儀の問題が存在したことである。前原準一郎や五十嵐新太郎の論説で指摘されたように、職工が集まる機業地という地域的特性と関連して産業活動において軽視できないこうした問題をかかえていたことを、当時の桐生が修養主義思想を重視する背景のひとつとして位置づけることができよう。

明治33年の時点で桐生は織物業の職工数13,308人（男工953人、女工12,355人）を数える職工の町であり⁴⁸⁾、彼らをいかに管理するかということが機業経営者の重要課題であったと考えられる。例えば明治33年において機台数35、男工13人、女工52人を擁する当時の桐生随一の個人工場において、詳細な罰則規定を制定して職工の行動を事細かに管理していることがそのことを裏付けている⁴⁹⁾。

このことと関連して注目しなければならないのは、桐生地方において織物業の機械化が進行するのは大正期であったということであり⁵⁰⁾、明治後期においては職工の労働そのものの重要性が力織機普及後に比較するとより大きかったと判断されることである。上述の個人工場においては、午前5時起床直ちに就業、午後8時終業後掃除という就業時間であったが、4日に1疋織りあげる女工に20銭、5日で織りあげる者に15銭、6日で織りあげる者に10銭の勉励賞与を与えることを賞与規則に明記している⁵¹⁾。他地方に比較しての当業者の手巧的技術の優秀さを誇る桐生⁵²⁾にあっては、「修養」をとおして職工が自らの技能を高め職務に専念することへの期待も特に大きかったと考えられるのであ

る。

このような当時の桐生地方の客観的条件が「修養」の機能的価値を大きくしたと考えられるのであるが、前章でみたように修養団の関係者に加えて東京(高等)工業学校の校長、教員、卒業生が『桐生之工業』、『織物工業』誌上において積極的に修養主義的思想を展開したことには、わが国における高等教育の文化的特質が関係しているのではないかと考えられる。

筒井は、第一高等学校校長新渡戸稲造ほかの思想を分析して、旧制高校の教養主義も修養主義から出立したことを明らかにしている⁵³⁾が、そのことから筒井は次のように論理を展開する。

学歴エリートの養成機関である旧制高校文化は「武士道的」なものから「修養主義」へと変化しつつ確立していったのであるが、そこでは「努力」「習得」による「人格の完成」に高い価値がおかれており、その点でそれは大衆文化の中核的エートスと何の差異もなかったのである⁵⁴⁾。

よって、

「努力による(人格の)向上」という点では原理的に同質の方向に進んでいる人々としてエリートが大衆に意識されるから敵対視よりも尊敬心をかちとり易いのである⁵⁵⁾。

こうしたわが国の文化的特質を考慮すると、東京(高等)工業学校という技術者養成機関の文化は第一高等学校の教養主義文化と同様に、あるいはそれ以上に大衆文化との同質性を持っていたと判断されるのである⁵⁶⁾が、こうした状況下において、東京(高等)工業学校関係者の修養主義的思想が職工問題という一つの焦点を通して桐生の産業の発展に貢献するという機能を期待されたと考えることができよう。

新渡戸稲造は学歴エリートである第一高等学

校生ばかりでなく、大衆雑誌において展開した修養論によって山深き寒村の少女等にも影響を及ぼしたといわれているが⁵⁷⁾、これまでみてきたような状況から判断すると、新渡戸と同じく修養団の賛助員であった手島は、東京(高等)工業学校生に対する教育にとどまらず、多くの職工が学校教育を正式に受けていなかった明治後期という時代状況の中で、『織物工業』誌上において桐生地方の機業関係者を対象として新渡戸と同様の役割を果たしたといえるのではないだろうか。その際には、東京(高等)工業学校において校長手島のもとで学んで同校を卒業し、地域社会の大衆から尊敬される立場にあった桐生の指導者層⁵⁸⁾が、そうした情報メディアの発行者として、またそのメディアの論説者として、さらにはそこで展開された理念の実践における中心人物として、中央から地方への修養主義の伝達者としての役割を担ったととらえることができる。

こうした明治後期の状況を経て、桐生機業界は大正の躍進期を迎えることになるのである。

註

- 1) 筒井清忠『日本型「教養」の運命 歴史社会的考察』岩波書店 1995年 160頁。
- 2) 拙稿「近代日本の資本主義と修養主義に関する一試論 一群馬県桐生地方における企業内教育を事例として」『仙台大学紀要』第29巻第1号 1997年。
東京高等工業学校は、明治14年5月に東京職工学校として創設され、明治23年3月の手島精一の校長就任とともに東京工業学校へ、さらに明治34年5月に東京高等工業学校へと名称を変更している。本稿では、東京工業学校、東京高等工業学校双方を示す場合は東京(高等)工業学校と略記する。
- 3) この経緯については同上拙稿。
- 4) 群馬県立桐生工業高等学校五十年史編纂委員会編『桐工五十年史 上巻』群馬県立桐生工業高等学校 昭和59年 45～46頁。この他にも朴正銑、登坂秀興といった東京(高等)工業学

- 校卒業生が桐生在住であった。『桐生之工業』第25号 明治33年10月15日発行 38頁。なお、明治30年1月に両毛地方在住の同校卒業生が「両毛東工同窓会」を組織しているが、明治36年時点では会員数約30名を数えている。『織物工業』第62号 明治36年11月5日発行 37～38頁。
- 5) 桐生市史編纂委員会編『桐生市史 下巻』桐生市史刊行委員会 昭和36年 973～975頁。
- 6) 本稿では最も長期に亘って使用された名称『織物工業』をタイトルに使用した。
- 各誌名による発行期間は以下のとおりである。『桐生の里』(明治29年9月～), 『桐生之工業』(明治31年10月～), 『織物工業』(明治36年9月～)。当時を語る文献では同誌は明治43年9月発行の第144号で廃刊となったとされている(前原悠一郎翁傳記編纂会編『前原悠一郎翁傳』昭和19年 第1編 100頁, 桐生織物史編纂会編『桐生織物史 下巻』昭和49年 208頁ほか)が, 東京大学明治新聞雑誌文庫には第156号(明治44年9月1日発行)までの在庫がある。
- 7) 同上『桐生織物史 下巻』206頁。なお, 桐生社の事務所は金子竹太郎の自宅に置かれていた。前掲『桐工五十年史 上巻』61頁。
- 8) 同上『桐生織物史 下巻』206～207頁。
- 9) 前原悠一郎『桐生の今昔』桐生市役所 昭和33年 421頁。
- 10) 『桐生之工業』第32号 32～34頁, 『桐生之工業』第33号 明治34年6月5日発行 7～8頁。このことが桐生懇和会で決定されるのは, 前原悠一郎が同会への入会を承認された明治34年4月19日の桐生懇和会第8例会においてである(『桐生之工業』第33号 7～8頁)。なお, 桐生社のもう一人の中心人物の岩下龍太郎も同年には会員となっており, 『桐生商工案内』の起草委員に推されて同書を執筆するなど, 桐生懇和会においても重要な役割を果たすことになる(『桐生之工業』第35号 明治34年8月5日発行 32頁ほか)が, 岩下は明治42年には富山県技師となり桐生を離れている(前掲『桐生織物史 下巻』156頁)。東京(高等)工業学校卒業の桐生織物学校教員経験者では, ほかに小嶋常太郎, 前原準一郎等が桐生懇和会員となっている。『桐生之工業』各号。
- 11) 前掲『前原悠一郎翁傳』第1編 101頁。
- 12) 桐生織物学校の在校生, 卒業生, 教員ならびに
- 地方名望家層からなる桐生織物学校校友会は, 機関雑誌代を桐生社に支払っている(『桐生之工業』第25号 明治33年10月15日発行 36頁, 『織物工業』第80号 明治38年5月1日発行 20頁ほか)が, 桐生社のメンバーが同校の教員でもあり, 『桐生之工業』, 『織物工業』誌上には桐生織物学校校友会の記事が掲載される「校友会欄」があることから, 同会の会員もこの雑誌の読者であったと考えられる。
- 13) 前掲『桐生織物史 下巻』に掲載。
- 14) 同上書 384頁。
- 15) 前原準一郎の経歴は以下のとおりである。
- 明治12年桐生新町に生れ, 明治35年東京高等工業学校紡織科卒業後専攻科で機織機械学を修め, 明治38年桐生織物学校教諭, 明治39年合資会社桐生製作所代表社員。前原準一郎や後出の金子竹太郎, 前原悠一郎等の経歴, 活動については, 拙稿「大正初期の地方高学歴層と地域社会—群馬県桐生町における中学校創設運動をめぐる—」『東北大学教育学部研究年報』第41集 1993年。なお, 桐生製作所には昭和2年に修養主義運動の代表的団体である修養団の支部が結成され, 前原準一郎はのちに修養団五十周年記念表彰を受けている。桐生機械社史編纂委員会編『桐生機械社史』桐生機械株式会社 昭和56年 45頁, 修養団運動八十年史編纂委員会編『修養団運動八十年史 資料編』(財)修養団 昭和60年 94, 165頁。
- 16) 『桐生之工業』第38号 23頁。
- 17) 『桐生之工業』第40号 2頁。金子の経歴は以下のとおり。明治7年桐生新町に生れ, 明治26年東京工業学校染織工科卒業, 明治29年桐生織物学校主席訓導(のち教頭), 明治40年両毛整織株式会社合資会社代表社員。両毛整織にものに修養団の支部が結成されている。前掲『修養団運動八十年史 資料編』94頁。
- 18) 『桐生之工業』第40号 3頁。
- 19) 同上 5～6頁。
- 20) 『桐生之工業』第45号 7～10頁。この五十嵐の意見は, 桐生織物学校校友会の研究発表会である学事会での発表を掲載したものである。
- 21) 『桐生之工業』第38号 22頁。
- 22) 『桐生之工業』第40号 2頁。
- 23) 『桐生之工業』第45号 11頁。
- 24) 筒井前掲書 16頁。
- 25) 当時の桐生織物業者間の弊風とその改善方策については前掲『桐生織物史 下巻』509～520

- 頁。
- 26) 『桐生之工業』第57号 20頁。
同会の会員数は112人、会費は年60銭であった。なお、桐生市史では、同会の創立は明治37年とされている。桐生市史編纂委員会編『桐生市史 中巻』桐生市史刊行委員会 昭和34年 516頁。
- 27) 同会の事務所は桐生町内の浄運寺に置かれている(同上『桐生市史 中巻』516頁)が、このことは同会のこうした性格の一端を示していると考えられる。
- 28) 『桐生之工業』第45号 6~10頁。
- 29) 『織物工業』第87号 23~24頁。
手島は明治23年から大正5年まで(明治31年1月から32年2月の期間を除く)東京(高等)工業学校校長を務めているが、その間、蓮沼門三の修養団の活動を援助して同団の賛助員にもなっており、修養団草創期の功労者と位置づけられている。修養団運動八十年史編纂委員会編『修養団運動八十年史 概史』(財)修養団 昭和60年 62頁、前掲『修養団運動八十年史 資料編』78頁、手島工業教育資金団『手島精一先生傳』昭和4年 298~310頁。
- 30) 『織物工業』第91号 27頁。
- 31) 『織物工業』第113号 20頁。阪田は手島の退任の後をうけて、東京高等工業学校の校長となっている人物である。東京工業大學編『東京工業大學六十年史』東京工業大學 昭和15年 254頁。
- 32) 筒井前掲書 8頁。
- 33) 前掲『修養団運動八十年史 概史』63頁。なお、『実業之日本』には同じく修養団賛助員の新渡戸稻造も修養論を連載していた。筒井前掲書 31頁。
- 34) 『織物工業』第113号 20~21頁。
- 35) 『織物工業』第114号 24~25頁。斎藤俊吉は明治34年4月に東京工業学校の修学旅行で機織科の生徒を引率し、桐生の機業視察を行っている。『桐生之工業』第31号 明治34年4月15日発行 28頁。
- 36) 『織物工業』第122号 1~3頁。ここでは、尋常小学校卒業の学歴は上の方であると指摘されている。
- 37) 同上 2~3頁。
- 38) 前掲『東京工業大學六十年史』545~549頁。東京工業学校附設工業教員養成所の附属工業補修学校は明治32年に設置されているが、その目的は、「晝間實地工業に従事する多くの職工に、日新科學を授けて之を實地に應用せしめ、且つ又職工の人格の修養を期する」ことであった。同書 547頁。
- 39) 『織物工業』第141号 明治43年6月1日発行 41頁。
- 40) 翌明治43年6月には同様の趣旨で第2回の染織講習会が15日間開催されるが、講習科目は「修身、染織、理化」の順に並べて紹介されている(同上)。なお、この講習会では桐生織物学校の全教員に加えて当時織物学校を退職し企業の経営にあたった校友会顧問金子竹太郎、前原悠一郎等が講師を務めており、募集人員50名のところ73名が受講している(前掲『桐生五十年史 上巻』70頁)。
- 41) 『織物工業』第139号 1~3頁。前原悠一郎の経歴は以下のとおり。明治6年桐生新町生れ、明治30年東京工業学校染織工科卒業、帰郷し織物製造業自営後明治32年桐生織物学校教諭、明治35年模範工場桐生撚糸合資会社代表社員。同社は明治41年に桐生撚糸株式会社に組織変更している。
- 42) この前原悠一郎、前出の金子竹太郎、前原準一郎はいずれも手島校長時代の東京(高等)工業学校の卒業生である。3人とも桐生織物学校教諭を経てそれぞれ桐生の代表的な3つの近代企業の経営者となっていくが、この3企業ではいずれも修養主義的経営が行われることになる。前原悠一郎の経営する模範工場桐生撚糸合資会社と前原準一郎の経営する合資会社桐生製作所がそうした経営によって発展していく状況については前掲拙稿(1997年)。
- 43) 『織物工業』第142号 2~3頁。
- 44) 同上 4頁。
- 45) 前掲『修養団運動八十年史 資料編』74~75頁。
- 46) 『織物工業』第142号 14頁。
- 47) 同上。なお、桐生においてもインドから織物の注文を受けている状況があった。『織物工業』第118号 明治41年7月1日発行 22頁。
- 48) 群馬縣内務部『群馬縣織物業沿革調査書』明治37年 34~44頁。
- 49) 前掲『桐生織物史 下巻』493~503頁。この工場の規則は明治32年の制定である。
- 50) 桐生市教育史編さん委員会編『桐生市教育史上巻』桐生市教育委員会 昭和63年 856頁。
- 51) 前掲『桐生織物史 下巻』495, 500頁。

- 52) 同上書 398 頁。
53) 筒井前掲書 29 頁。
54) 同上書 34 頁。
55) 同上。
56) 筒井は、日本の高等教育における正系の帝国大学も当初から工学や農学の教育を行い、傍系の専門学校と競合関係にあったことなどを指摘する天野の業績を引用しながら、「正系」の大卒エリートは「傍系」の専門学校卒業者との差異化に困難を伴うであろうと述べている(同上書 46 頁)。こうした日本の高等教育の特質を考えると、「正系」の第一高等学校と「傍系」の東京(高等)工業学校の文化の面での同質性が指摘できると考えられるが、P.ブルデューらがフランスの状況について指摘するように、「手仕事」や「技巧」等がエリート文化において蔑視されたということを考慮すれば(P.ブルデュー・J-C.パスロン『再生産〔教育・社会・文化〕』宮島喬訳 藤原書店 1991 年 161～162 頁、筒井同上書 33 頁)、実業教育機関である東京(高等)工業学校の方が第一高等学校

よりも一層大衆文化に近い性格を持っていたと捉えることができるだろう。

日本の高等教育の文化的特質については、田中紀行「近代化過程における学歴エリートの比較分析 ―ドイツと日本を事例として―」筒井清忠編『「近代日本」の歴史社会学 ―心性と構造―』木鐸社 1990 年。

- 57) 筒井前掲書 31～32 頁。
58) 桐生織物学校卒業生の一人は、金子竹太郎、前原悠一郎、前原準一郎、岩下龍太郎といった当時の同校教員は、いずれも桐生町の名門の出であり、特に金子竹太郎は黒川真頼博士を祖父に持つ「当代傑出の新智識」であったと語っている。田島生成「織物学校の思い出」(昭和 15 年執筆)前掲『桐工五十年史 上巻』91 頁。黒川真頼は明治 26 年から東京帝国大学文科大学の教授を務めた人物である。前掲『桐生市史中巻』235 頁。

(平成 9 年 10 月 31 日受付, 平成 9 年 12 月 15 日受理)